

北海道新聞

平岸の歴史を訪ねて

／開拓編／

第19回、水沢から平岸へ②

北海道への移住

戊辰戦争で敗れた仙台藩は領地を大きく削られ、伊達家一門や重臣たちの“支藩”も領地を没収され、その一部は他藩のものとなります。また、その家臣たちも一挙に無禄へと転じていきました。仙台藩は、彼らから士分を取り上げ、農民とする方針をとりました。しかし、このことは武士の誇りである苗字帯刀を捨てて、他藩の百姓になることであり、耐え難いことでした。このような中で、北海道への移住案が浮上してきます。北海道への移住は、「北地跋涉(ほくちばっしょう)」と呼ばれていました。「跋涉」とは山野を歩き回るとい意味で、登山家や冒険家を使うような用語ですが、わざわざこの文字をあてたことに、当時の北海道の未開さ、移住の困難さがうかがえます。北地跋涉は、新国家の防備に役立つために、ロシアの脅威にさらされている北海道の開拓に身をささげようというものでした。これは、戊辰戦争に敗れ朝敵とされ、しかも生活のめどの立たない家臣たちにとっては、武士の面目の回復という大義名分が旗印にされている点で説得力を持つものでした。このような流れの中で、亘理伊達家(有珠郡を開拓)や白石片倉家(はじめ登別市、後に白石区を開拓)が北海道への移住を決めます。

札幌に水沢の面影をみる

水沢伊達家の家臣たちも、北海道への移住を計画し、明治3年、入植地の選定と開拓使との打ち合わせのために札幌に入ります。彼らが入植地と決めた場所は、実は平岸ではなく、苗穂のあたりでした。ところで、札幌と水沢はその地形において共通点があります。札幌が定山溪から流れる豊平川の扇状地の上に作られている(図1)のに対し、水沢は奥羽山脈から流れる胆沢川の扇状地に作られています(図2)。水沢は、胆沢川の扇状地の末端部分の湧き水が豊富に湧き出している場所に市街を形成しました。札幌でいえば、豊平川の扇状地の末端は北大キャンパスのあたりから苗穂にかけてであり、昔はこのあたり一帯から湧き水があふれ、美しい小川が流れていました(サッポロビールもこの湧き水を使って作られていました。今はサッポロボール園になっています)。彼らが、新たな開拓地として長年親しんできた風景を求めたのは当然の成り行きだったでしょう。しかし、この場所は札幌市街から近すぎるなどの理由でのちに取り消され、結局は平岸に移ることとなります。

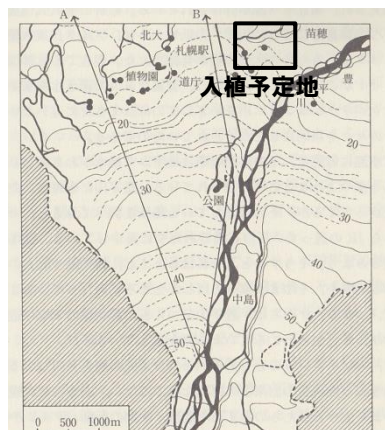


図1. 札幌の地形と湧き水跡(黒丸)
(北海道の自然史より)



図2. 水沢付近の航空写真

当主の拒絶

北海道への移住は、他の支藩のように当主を擁して行う予定でした。ここで、水沢伊達家当主邦寧について簡単に紹介します。天保元年(1830年)、水沢伊達氏第十一代当主・伊達宗衡の五男として水沢に生まれます。慶応元年(1865年)兄・邦命の死去により家督を相続し、水沢邑主となりました。ときに幕末、仙台藩内においても勤王・佐幕の議論が激しく、藩論が真っ二つに分かれていました。邦寧は勤王の志厚く、仙台藩主慶邦に官軍側に付くよう説きますが、容れられず、皮肉にも戊辰戦争の際には、藩主の代理として白河口に出陣することとなります。白河口の戦いは、戊辰戦争最大の激戦となり、水沢藩士も十七名が戦死する大きな被害を出しました。

戦局の不利により藩論が恭順に傾くと、藩主の命で、降伏の正使となります。敗戦により、本藩が62万石からを28万石に減封され、邦寧も水沢領を失います。このときから、伊達氏の姓を捨て、約400年ぶりに留守氏を名乗ります。この苗字変更は、明治政府に対し、朝敵となった伊達家と区別してもらう意図と、領土を没収した本藩に対する決別の意志表示ではないかと考えられます。

明治の世になり、胆沢県の大参事から県の官僚の人選を依頼され、旧臣の子弟片桐清治、斎藤実、後藤新平を推挙しました。この中から、戦前の日本を代表する政治家が二人も出たことを見ると邦寧の人物眼の確かさがうかがえます。このころ、家臣から北海道への移住を進言されます。ところが、邦寧はこれを断ります。「如何ニモ北海道ハ魯西亜領ニ接近シ、実ニ日本枢要ノ地ナレバ、衆ヲ移シ屯田拒守セシムハ勿論要スル処ナリ」と北海道の開拓の必要性は認めつつも、「予モットモ其ノ念ナキニ非ズト雖ドモ、性虚弱ニシテ北域ノ寒地ニ耕鋤スル、吾レ其ノ任ニ堪エザル所」であると、体が病弱で寒さに耐えられないという理由で断ってしまうのです。事実、邦寧は病気がちで、明治7年52才の若さで亡くなります。当主の拒絶は求心性や移住経費の点で大きな障害となり、移住志願者が激減してしまいます。結局、移住を決めたのは25戸だけであり、これでは足りないので周辺村落などから移民を募り、最終的に65戸203人が平岸へ入植することになります。

参考資料『北海道の自然史―氷期の森林を旅する―』小野有五・五十嵐八枝子・北海道大学図書刊行会。

平岸百拾年、『平岸百拾年』編集委員会

水沢町誌、水沢町

新札幌市史第2巻、札幌市教育委員会

バックナンバーお届けいたします。ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

『編集後記』 〈留守邦寧〉

「幾秋も 契り重ねむ九重の めぐる屋に世の 菊の盃」。晩年邦寧が詠んだ歌といわれています。一見すると重陽節(菊の節句)の歌のようですが、実際には戊辰戦争で亡くなった郷土の藩士たちを悼んだ歌のようです。自分の思いとは裏腹に、歴史のうねりに飲み込まれ翻弄された邦寧。北海道への移住を拒否したのも、病気だけではなく厭世の気分が強かったからかもしれません。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年室蘭市生まれ。金沢大学理学部地球学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

TEL: 0120-128-348

Fax: 0120-128-358

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みしています